

2025年2月総評 暮田真名

あさがおをこころの中で

抱えてる

ピーヒャラ、ピ

ずっと会いたいよ

/ 松浦やも

ちびまる子ちゃんのテーマ「おどるポンポコリン」に「ピーヒャラ ピ お腹がへったよ」という歌詞がある。二つ目の「ピ」は「ピーヒャラ」のいいさしだ。コミカルさを切なさに転換する技術。

花びらは涙のための洋食器

/ 飛和

「食器」を「洋食器」と書くことが単なる字数合わせではなく、異化効果を生んでいる。

「花びら」、「涙」という感情を喚起する力の強い語彙を使いながら、どこかミニチュアの世界で遊んでいるような平熱の視点を持っている。

春の三日月リカちゃんにピアス跡

/ 檜野 美果子

たしかにリカちゃん人形の耳にはピアスを刺すための穴がある。人間のピアス痕は使っていなければ塞がるが、リカちゃんのそれはいつまでも塞がらない。リカちゃん人形で遊ばなくなつたあとも。かすかな永遠性が漂う。

定休日なくなるうたいすぎたから

/ on

例えば定休日の前日の夜にカラオケバーにいて、0時を過ぎてもまだ歌い続けていた。もっとも現実的な読み筋を探るならばこうなるだろうが、こういった景には収まらない異様さがこの句にはある。「定休日なくなる」が、一日だけに限つたことではない気がするのだ。

木耳を食べるフルート奏者たち

/ 互井宇宙論

「きくらげ」と読む漢字に「耳」が入っていることと、「フルート奏者」が耳を楽しませる仕事であること。食べているのは木耳だが、どうしてもフルート奏者たちが耳を食べているイメージが浮かぶのを避けられない。食べているのは聴衆の耳だろうか。

ひとつずつ春の台詞を入れていく

僕のからだを一度壊して

/ 香取小春

下句によって、解体や搬入といった建築的なイメージが浮かぶ。「春の台詞」は実体を持たないように見えて、実は大きな質量を持っているのかもしれない。春の芽吹きや誕生は、冬の間に固まった地面を壊しながら実現される。春のおそろしさにも目を向けた好句。

怒られて私の顔が暗いとき

虚無僧姿の執事が居たら

/ 太田 美

上句の妙な客觀性。「暗い顔をする」という言葉はあるが、「私の顔が暗いとき」のねじれ方は不思議だ。そう思っていると、天蓋を被った「虚無僧」が登場する。物理的には虚無僧の顔のほうが暗いはずだ。「暗い」という言葉が比喩から実景に推移する。

さみしくて

ポストのようにさみしくて

君の手紙を食べてもさみしい

/ むしまる

ストレートな書きぶりだが、「ポスト」という比喩にはっとさせられる。ポストの中の郵便物は一日に何度も回収され、満たされるということがない。手紙を食べる動物として有名なのはヤギだが、無機物の赤い欠乏を見いだした点を評価した。

友人がたくさんいるような岩肌

その前で写真を撮った

/ 浪花 小槻

顔認証カメラを使用していて、人のいないところが顔だと認識されることがある。些細な凹凸に反応しているのだろう。この歌では、カメラではなく人間が岩肌に「友人」を見出している。カメラに乗っ取られているようで、すこし怖い。

いらっしゃい

ここはなんにもないや館

なんにもない感じあります

/ にわ

「なんにもないやかん」、「なんにもないやかた」、どちらだろう。そして「なんにもないや館」とはなんだろう。建物だけがあり、中には何もないのだろうか。「なんにもない」けれど、「なんにもない感じ」はある。この書き出しの絵本が読んでみたい。